

豊饒史のために考察する

二〇一五年に岡本太郎美術館で発表した《豊饒史のための考察》は、私たちが前年に経験した民間信仰をテーマとして制作した。二〇一四年、私たちは別の制作のリサーチとして、石川県金沢市の真成寺と京都府宇治市の縣神社の二つの寺社に足繁く通っていた。

二つの寺社を錯綜しつつ訪れていた私たちは、臆気ながらも両者に潜在している共通項を抽出する作業もまた必要だろうと考えた。それは「なぜ祈るのか」という問いへの回答を用意することに他ならない。この大きな命題を私たちは意識せざるを得なくなった。真成寺や縣神社へ訪れると、祈りの現場を何度も目撃する。我々はいつも目の前に繰り返される世界だけが日常になる。けれども寺社には我々の日常とは異なる位相にいる人が訪れる。それは公共空間の大きな特徴である。いま、現代でも、深い祈りを持ち、拠り処を求め人はいる。しかも、求める人／求めない人ははじめから区別されてはいない。すべての人間はいつでもその境界を越える可能性を孕んでいる。そして宮司は、住職は、いつやってくるかわからない祈願者を、ごく自然に、とても丁寧に迎え入れる。

この祈りをめぐる営為に潜在するこの漠然たる豊饒性は一体何なのか。私たちは、人間が行う祈りのプロセスからその「豊かさ」を抽出し、それを紐ぎ合わせた「豊饒史」の構築を考えた。誰もが知るとおり、この一世紀の間にあらゆることが実現し、そのための物や技術で世界は溢れた。物質的な豊かさは飽和点に漸近している。では、近未来の暮らしをどう考えるのか。私たちは、物質／精神の均衡についてより意識的になる必要があると思った。近未来の社会はもっと、私たちが真成寺や縣神社で経験した精神的な豊かさとともに作られて良いはずだからだ。

豊饒史は、文字通り「史的」な眼差しを持つ。つまり、幾つもの要素を、事象を、物質を拾集し、アーカイブしていく作業の中でその概念の構築を目指している。本作品《豊饒史のための考察》では、民間信仰の場面でしばしば用いられる物質を拾集し、メディアウムとして扱った。メディアウムは、切断や加工はせず、さまざまな組み合わせによって立体的・可変的に配置して空間を構成した。米、鈴、木の実、羽根、糸、ビーズ、装身具……。ステイトメントの通り、配置された物資は、配置関係・角度・遠近差がつくる多層の印象によって、そのシニフィエは一旦取り外される。たとえば、「米」は言葉として記された意味を伴う「米」ではなく、この空間では白く細長くやや艶のある堅い印象の「一つの物質」として見ることができる。私たちは、その物質の組み合わせを連続させボトムアップ的に空間を構成した。このとき、先の「米」への視線の中に、五円硬貨や天秤が入ってくるだろう。このレイヤーの中にある関係性を持った「米」は、とても経済的で税金的で供物的な存在として立ち振る舞うことになる。

ミクロな眼差しから見えてくる物質の「一つの物質」としての性質と、マクロな眼差しから見える関係性の中にあるパーツとしての物質。私たちは、このようにこの重層的なレイヤーを視点が行き来する空間を構成した。

ここに配置された物質は、長くこの世界にあり続けている。私たちの祖父や曾祖父が生きた一〇〇年前も、近世社会の始まった四〇〇年前も、古墳時代や弥生時代のような一〇〇〇年以上前であっても、それは存在していた。長く分厚い時間の中で、人間は祈りの場面でさまざまな意味を「一つの物質」へ纏わせてきた。そして時にはそれが、時間経過とともに「一つの物質」を規定する共通イメージにもなっている。シニフィエは個人を越え、世代として、時代として継承される。この普遍性は、きっと社会性を帯びた精神的な豊かさへの導線になる。